

目次

序にかえて

江田郁夫 1

総論 下野宇都宮氏

江田郁夫 6

第1部 平安末期・鎌倉時代の宇都宮氏

I 奥羽周辺地域の武士団形成―下野国を中心に―

須藤 聡 36

II 「宇都宮家弘安式条」の条文構成とその意味

藤本祐子 67

III 中世東国の地方都市

斉藤利男 94

第2部 南北朝・室町時代の宇都宮氏

I 南北朝期の宇都宮氏―宇都宮氏綱を中心に―

清水昭二 116

II 上総守護宇都宮持綱―満済と義持―

山家浩樹 139

III 室町幕府と下野「京都扶持衆」

杉山一弥 159

IV 宇都宮等綱に関する一考察

島村圭一 185

第3部 戦国時代の宇都宮氏

- I 永正期における宇都宮氏の動向 吉田正幸 210
- II 大永期の宇都宮氏―大永の内訌と宇都宮家中― 江田郁夫 237
- III 一通の小山高朝書状をめぐって 吉田正幸 259
- IV 元龜期の宇都宮氏―甲相同盟と宇都宮家中― 江田郁夫 275
- V 近世成立期東国社会の動向―結城朝勝の動向を中心として― 市村高男 293

第4部 宇都宮氏の一族・家臣

- I 文献史料から見た飛山城の歴史と性格 市村高男 318
- II 越相同盟と下野国西方氏 市村高男 351
- III 徳雪斎周長の政治的位置―一次史料の検討をつうじて― 佐々木茂 371
- 「宇都宮氏系図」・「宇都宮氏略年表」 江田郁夫 402

初出一覧／執筆者一覧

下野宇都宮氏

総論 下野宇都宮氏

江田郁夫

はじめに

下野一宮、宇都宮明神（二荒山神社）の神官御家人である宇都宮氏は、どのような特色をもつ領主権力なのか。本稿では、下野宇都宮氏の特質について、これまでの研究成果を時代・テーマごとにたどりながら、具体的にあきらかにしていきたい。そのうえで、今後へのこされた課題についても、可能な範囲で論及したいと思う。

一 平安末期・鎌倉時代の宇都宮氏

1 宇都宮氏の成立

近江石山寺の座主で、宇都宮氏の初代と伝えられる宗円の実在を示す史料は、いまだ確認されていない。そのかわり、二代宗綱については、鎌倉幕府の公的史料である『吾妻鏡』に「故八田武者宗綱」の名前があり（治承四年（一一八〇）十月二日条）、実在が確認できる。ただし、問題は宗綱の名字が宇都宮ではなく、「八田」とされていることである。

この点については、「八田」が常陸小栗御厨内に所在した八田（茨城県筑西市）にあたる可能性がたかいたことが指摘されている。^①とくに小栗御厨八田の地には、小栗氏の居館である「八田館」が存在するなど（『吾妻鏡』治承四年十一月八日条）、中世の町場だったと考えられている。^②そもそも八田は、常陸府中（茨城県石岡市）から下野宇都宮、そして奥州へといたる中世の幹線交通路上に位置する要地であり、それゆえ町場が成立し、小栗氏をはじめ、八田氏や益子氏などの領主たちが八田を基盤とするようになったとみられている。

ただし、宗綱はいっほうで滝口武者として天皇に仕え、伊勢平氏や河内源氏などの武家の棟梁たちとも緊密な交流をもっていた。^③つまり、宗綱は京都に基盤をおいて活動する京武者としての側面と、常陸平氏との結びつきをもとに八田に拠点を構えて、町場・地域支配にあたる領主的な側面とを併存させていたのである。

もちろん、そのような特徴は、宗綱の子朝綱にも受け継がれていた。朝綱は「下野国住人」（『玉葉』）ではあっても、鳥羽院武者所、後白河院北面をつとめたと伝えられ（続群書類従所収「宇都宮系図」、以下「系図」）、源頼朝が伊豆で挙兵した治承四年の時点でも内裏大番役勤仕のために在京していた。

また、朝綱の孫、頼綱も洛中に居宅を構え、在京活動時の拠点としていた。頼綱の在京活動は、和歌をつうじた藤原定家らとの文化的な交流や浄土宗を中心とした宗教活動、そして京都政界の実力者西園寺氏とも積極的に接触を試みるなど、政治・経済面にまでおよんでいたという。このような在京活動は、本領宇都宮の地域支配とも密接に連動していたとされる。^④

それでは、もともと常陸八田に基盤をおいていた宇都宮氏は、どのようにして宇都宮への進出を果たしたのだろうか。系図などの諸史料からは、どうやら平安末期の宇都宮には藤原姓宇都宮氏以外にも、佐々木定綱や中原姓宇都宮

氏、紀姓宇都宮氏の存在が知られる。このうち、紀姓宇都宮氏は八田に隣接する下野芳賀郡を拠点としていた模様で、宗綱の子朝綱は紀姓宇都宮氏との姻戚関係をもとに宇都宮に進出し、のちに紀姓宇都宮一族をみずからの郎従（紀清両覚）とした可能性がたかい。⁵⁾

当時の宇都宮は、関東と奥州を結ぶ幹線交通路の奥大道がとおる交通の要衝であり、奥州への軍事拠点として、藤原姓宇都宮氏をはじめ、佐々木定綱や中原姓宇都宮氏、紀姓宇都宮氏らが駐屯していたと考えられている。なかでも、藤原姓宇都宮氏出身の朝綱は、下野一宮宇都宮明神の社務職（檢校職）を保持していたため、最終的には他姓の宇都宮氏との競合関係に終止符をうって、宇都宮を本領とするにいたった。⁶⁾ 中世宇都宮氏の成立である。

その後、朝綱の宇都宮明神社務職は源頼朝の安堵をえて、朝綱の子孫に世襲されていった。鎌倉幕府の有力御家人となった宇都宮氏は、武家であると同時に神官でもあった。したがって、幕府の御家人として通常は鎌倉に居住することが多かったにもかかわらず、宇都宮明神の春・冬の祭り、三月会、一切経会、五月会、六月の臨時祭り、九月会などの神事のさいには、鎌倉から宇都宮に戻って、神事にあたるのを通例としていた。

宇都宮明神は、下野日光山、二荒山権現の別宮であり（『続古事談』）、平将門の承平・天慶の乱から、奥羽の前九年・後三年合戦、源平の治承・寿永の乱、文治五年（一一八九）の奥州合戦、文永・弘安の元寇にいたるまで、「代々の朝敵追罰の奇瑞分明」の神として、人びとの崇敬を集めてきた（宇都宮大明神代々奇瑞之事）。このため、明神の五月会頭役は、源頼朝によって下野国内の地頭御家人の所役と定められ、また九月会頭役は宇都宮氏の一族・家臣に配分された。宇都宮氏の領支配は、下野一宮宇都宮明神の存在と密接不可分の関係にあったといえる。

2 神官御家人宇都宮氏

朝綱以降、宇都宮氏は代々鎌倉幕府の有力御家人として、評定衆・引付衆などの重職を歴任している。したがって、宇都宮氏は鎌倉に居住することが多く、また頼綱・泰綱父子のころまでは在京活動も活発だった。くわえて、頼綱以後、代々の当主は幕府執権の北条一族の娘を正室としており、四代泰綱・六代貞綱・七代高綱（のち公綱）は、それぞれ北条氏嫡流の得宗泰時・貞時・高時から「泰」「貞」「高」の一字を拝領している。幕府における宇都宮氏の立場は、北条氏との関係いかんにかかっていた。

唯一の例外が五代景綱で、かれは幕府の要人安達義景の娘を正室とし、実名の「景」の一字も義景から拝領したと考えられる。とはいえ、当時、安達氏は北条得宗家の外戚として執権を補佐しており、幕政の中枢に位置していた。とくに義景の嫡子泰盛は、景綱とは義兄弟の関係にあったが、新執権貞時のもとで弘安七年（二二八四）から弘安の徳政と総称される一連の幕政改革を主導し、その綱領にあたる『新御式目』の制定にもふかく関与していた。

となると、その前年の弘安六年に景綱によって成立した宇都宮氏の家法『宇都宮家弘安式条』（以下、『式条』）は、時期的にも、また人的なネットワークからいっても、弘安の徳政とその綱領『新御式目』と密接に関連していた可能性がたかい。

ちなみに、『式条』は、全体で七〇か条にわたる多種多様な条文から構成されている。⁷⁾ 内容的には、①宇都宮明神やその神宮寺などの社寺に関する規定、②宇都宮氏の主宰する法廷・裁判に関する規定、③その他、領内支配に関する諸規定、に大別できる。とくに①の社寺に関する規定が全体の三分の一以上を占めている。総じて、『式条』の表題に「私に定め置く条々」とあるとおり、宇都宮氏支配下の人・土地・ものを対象に制定された。鎌倉幕府の基本法である『御成敗式目』が制定されてから五一年後に成立した『式条』は、鎌倉時代の武家法のなかでもっともはや

いものひとつといえる。

3 中世都市宇都宮

これまでも『式条』をもとにして、神官御家人宇都宮氏の領主支配や整然とした裁判機構、領内における市場の存在、そして中世都市宇都宮の様相などの解明が進められてきた⁸⁾。とりわけ、中世都市宇都宮の実相については、注目すべき成果が積み重ねられてきている。

鎌倉時代の宇都宮は、宇都宮明神の門前「宮中」と、鎌倉と奥州外が浜を結んだ幹線交通路である奥大道の宿駅「宿河原」から構成される複合都市だった。「宮中」には、宇都宮氏の一門・神官たちの屋敷が立ちならび、いっぽうの「宿河原」はさらに「上河原」「中河原」「小田橋」の三宿に分かれていたという。

中世都市宇都宮の特質は、たんなる門前・宿駅にとどまらず、宇都宮氏の一門・家臣が集住して町屋の都市民をはじめ、領内諸階層の支配にあたる政治都市でもあった点にある。つまり、宇都宮は、宇都宮一族全体にとって、所領支配のセンター的役割を担っていたとされる。

ただし、「宿河原」の実態については、異論もある¹⁰⁾。『式条』の五八条には、「かの宿々」として「宿、上河原、中河原、小田橋」の宿名が列挙されており、素直に解釈すれば、冒頭の「宿」も「かの宿々」のひとつと理解すべきだろう。事実、宇都宮の「かの宿々」は、『式条』の五五条では「宿河原」と総称されている。これも、宿と「上河原、中河原、小田橋」の河原宿から構成されるという宇都宮の宿駅のありかたの反映と考えられる。

たしかに、宇都宮を南流する田川に沿った「上河原、中河原、小田橋」の河原宿の対岸には「宿の郷」があり（「寺社古状」、南北朝時代には「むかい宿」ともよばれていたらしい（「妙正寺文書」）。近世の宇都宮城下絵図によ

ば、「宿の郷」は宿郷村に編成されていたが、なお村内には「河原宿」「中宿」「八日市場」の地名が散見される。近世の宿郷村の起源が、中世の宿駅「宿の郷」にあったことは確実といつてよい。

また、戦国時代末から近世初頭の宇都宮には、奥大道沿道の「宿河原」のほかにも、「西小路」「上コウジ（小路）」「寺コウジ（小路）」「歌橋」の地名や（清浄心院「下野国過去帳」）、「今小路」などの存在が確認できる（「大和田重清日記」）。このうち、「寺コウジ（小路）」は近世の寺町の前身で、小路に沿って寺院が立ちならんでいたとみられる。いっぽう、「今小路」には金細工が集住していたらしい。すでに戦国時代の時点で、宇都宮には多くの小路が縦横にはしる、そうとうの町場が形成されていたことがわかる。

それでは、中世都市宇都宮の起源はいつごろまでさかのぼるのだろうか。史料的な制約があつてあくまで状況証拠にとどまるものの、中世宇都宮氏の成立過程が示唆にとむ。平安末期の宇都宮には藤原姓宇都宮氏以外にも、佐々木定綱や中原姓宇都宮氏、紀姓宇都宮氏らが集住していた。すでにこの時点で、奥州への結節点として宇都宮は重要な位置を占めており、それゆえ多くの在地領主が宇都宮に拠点を構えたのだという¹¹⁾。つまり宇都宮は、十二世紀をつうじて都市化していったと考えられるという。

二 南北朝・室町時代の宇都宮氏

1 宇都宮氏綱と芳賀禪可

鎌倉幕府の滅亡、そしてその後の南北朝の内乱時の宇都宮氏当主は、七代公綱（初名高綱）である。当初、公綱は